

2) 新潟大学泌尿器科における過去 10 年間の腎血管性高血圧症症例について

武田 正之・片山 靖士 (新潟大学泌尿器科)
田村 隆美・北村 康男
佐藤昭太郎
木村 元政・小田野幾雄 (同 放射線科)
渡辺 学 (県立ガンセンター泌尿器科)

1977年4月1日から1987年3月31日までに新大泌尿器科を受診し、腎血管性高血圧症(以下 RVH)と診断された患者は17例、男性7例、女性10例であった。病変の種類は、病理組織学的所見および血管造影所見から繊維筋性異形成9例、動脈硬化症6例、解離性大動脈瘤1例、大動脈炎症候群1例であった。治療法は腎摘除術6例、経皮的腎血管形成術(PTRA)3例、自家腎移植術2例、大動脈腎動脈バイパス術2例であった。1977年からの5年間では5例に腎摘除術が施行されたが、1983年からの5年間では1例のみであり、1986年からはPTRAが治療の主体となっている。診断法、治療方針、腎機能評価方法についても述べた。

3) 先天性心疾患における実時間二次元ドプラ血流映像法の有用性と問題点

佐 藤 勇 (新潟大学小児科)

先天性心疾患の心血管内血流診断における実時間二次元ドプラ血流映像法(2DD)の有用性と問題点について検討した。2DDは、LV-RA communication, ASDcPAPVC, straddling of mitral valve, などの混在した多方向性の血流像の観察に有用であった。また三尖弁閉鎖と鑑別が必要であった三尖弁狭窄では、心電図に同期することにより、一時相における血流分布と心内構造物との関係を知ることができ、高度な狭窄性病変の診断に有用であった。一方 large VSD と診断した1例は、手術時に多孔性のVSDと診断された。shunt flowを一魂としてとらえたため診断をあやまっと考えられた。血流像のみで形態診断をおこなうには注意を要すると考えられた。

4) 運動負荷にて冠スパズムが惹起されたと 思われる高度狭窄を伴う2症例

—運動誘発冠スパズム時の心筋シンチ
グラムについて

小田 弘隆・津田 隆志 (新潟市民病院)
佐藤 広則・樋熊 紀雄 (循環器内科)

左前下行枝に高度狭窄(AHA 分類99%)があり、運動負荷時にST上昇を認めた安静兼労作狭心症2例で、

負荷心筋シンチグラムに特徴ある所見を認めたので報告する。

症例1において同程度の運動負荷量にてST上昇する場合とST低下する場合があった。症例2において負荷時のST上昇は再現性がありCa拮抗薬で防止された。2症例とも心筋梗塞の既往がなく、左室造影にて壁運動異常を認めず、ST上昇部位は左前下行枝支配に一致した。負荷心筋シンチはTreadmillを用いBruce法で行い、ST上昇時に²⁰¹Tlを静注し、直後と2時間後に撮像した。結果は、(1)直後では前壁中隔に広範かつ明瞭な欠損像、(2)肺野への集積増加と右室自由壁の著明な抽出、(3)2時間後、明瞭な再分布を認め、同部のWashout Rateは著明な低値を示した。

以上、高度左前下行枝狭窄があり運動誘発冠スパズム時の心筋シンチグラムの特徴として上記(1)、(2)、(3)が認められた。

5) 当院における冠動脈内血栓溶解療法の 経験

土谷 厚・田村 雄助 (新潟こばり病院)
塚田 徳昌・矢沢 良光 (循環器内科)
蒲沢 壮夫

昭和58年4月～62年5月の当院で冠動脈内血栓溶解療法(PTCR)を受けた急性心筋梗塞患者74名のうち、昭和59年末以後の44名について検討した。心筋梗塞発症から冠動脈内へのウロキナーゼ投与開始迄の時間を2時間以内、2～4時間、4～6時間、6時間以上で分けると、各々2例、22例、8例、12例であった。冠動脈の完全閉塞が開通した22例と99%狭窄の改善例の8例の計30例(68%)に効果を認め、非開通例は11例(24%)で、既開通で不変の例は3例であった。発作後3時間以内の早期の症例は15例で、完全閉塞の12例中11例で開通が得られ、3例の既開通例中2例では狭窄の改善を認めた。冠動脈の病変部位でみると右冠動脈例は17例でNo. 1, 2, 3に各々10例、2例、4例認め、左冠動脈例は27例でNo. 6, 7, 13に各々12例、10例、3例を認めた。

II. 特 別 講 演

1) 最近当惑した諸問題について

山梨医科大学第二内科

田 村 康 二 教授

1. 循環生理情報センターの整備

伝統には口頭によるものと物によるものがあり、口頭によるものは人がいなくなれば消えるが、物であれば後